

1 はじめに

- 「語」を(通言語的に)定義することは難しい
 - Jespersen (1924: 92): “What is a word? And what is one word? These are very difficult problems [...]”
 - Langacker (1972: 37): “The word is a difficult notion to define.”
- 「語」とは何かに関する楽観論 (Tallman 2020, 2021)
 - **The word bisection thesis** (Dixon & Aikhenvald 2002; Dixon 2010)
“Units ‘phonological word’ and ‘grammatical word’ can, without doubt, be recognized for all languages” (Dixon 2010: 7)
 - **The tendency to converge thesis** (Matthews 2002)
“No [wordhood] criterion is either necessary or sufficient [...] But they are relevant insofar as, in particular languages, they do tend to coincide.” (Matthews 2002: 274)
- 「語」とは何かに関する悲観論 (Haspelmath 2023)
 - “it is quite possible that the salient general notion of *word* is an artifact of European spelling conventions” (Haspelmath 2023: 295)
- 「語」の認定に関する方法論的問題 (Haspelmath 2011)
 - “The more criteria converge, the more persuasive the argument [for a given word constituent] becomes, but the method is not rigorous, because the criteria can be selected opportunistically by the author” (Haspelmath 2011: 59)
- 本発表ではタガログ語のデータを検討しながら「語」の認定問題について検討する
 - タガログ語はフィリピン共和国マニラ首都圏を中心に話されているオーストロネシア語族西マレー・ポリネシア語派に属する言語である
 - 動詞とその周辺要素について通言語的によく用いられるさまざまな「語」の認定テストを適用し、認定テストの妥当性を検討する
 - タガログ語においては、ある一つの単位を取り出して特別に「語」と認定する根拠があまりない
 - * 音韻語と文法語のミスマッチのみならず、テストの結果間におけるミスマッチがある
 - * この問題を考えることでタガログ語についてより精緻な記述が可能となることも事実である
 - * 他の言語ではどうだろうか? 他の言語では語がうまく認定できる可能性もある
- 本発表の構成
 - 第1節: はじめに
 - 第2節: タガログ語の動詞を中心とする要素の配列
 - 第3節: 音韻論的な語の認定テスト

* 本稿に関する内容については以下の方から貴重な意見および情報をいただいた: 窪田晴夫、沈力、由本陽子 (敬称略)。本稿の内容の一部は Constituency 2021 (2021年4月28日) における発表をふまえたものである。その際には Adam Tallman、内原洋人、中本舜の各氏から貴重なコメントをいただいた。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも著者の責任である。なお、本研究は JSPS 科研費 JP21K00522 (代表: 長屋尚典) および JP21H00528 (代表: 田窪行則) の助成を受けたものである。

- 第4節: 形態統語論的な語の認定テスト
- 第5節: タガログ語の音韻語と文法語

2 タガログ語の動詞を中心とする要素の配列

- 今回は動詞を中心とする要素の配列について分析する
 - 名詞の方はもっと単純な構造をしており今回の分析には動詞の方が適切である
 - Kaufman (2010) などの先行研究なども動詞をもっぱら分析している
- タガログ語の動詞を中心とする要素の配列 (簡易版; cf. “planar structure” [Tallman 2021])

動詞語根とその周辺要素

可能 - ヴォイス₁ - アスペクト - 動詞語根 - ヴォイス₂ - 単音節前接語群 - 複音節前接語群

- ヴォイス接辞は語根の前に出現するか、後に出現するかのどちらかである
 - * ヴォイス₁: mag-/i-
 - * ヴォイス₂: -in/-an
 - * ヴォイス接辞の機能の一つは動詞の項構造を決定すること
- 前節語群は節の第二位置に出現する
- 便宜的に「前接語」という概念や例文における境界記号の使い方はタガログ語研究でよく用いられるものを用いている
- タガログ語の辞書は語根でひくものが一般的であるが、「可能 - ヴォイス₁ - アスペクト - 動詞語根 - ヴォイス₂」のスペンを辞書形として採用するものも存在する

(1) ma-i-se~send=ko=talaga bukas

POSS-CV-ASP~send=1SG.GEN=really bukas

‘I will be able to send (it) tomorrow.’

(2) ma-bu~buks-an=ko=talaga bukas

POSS-ASP~open-LV=1SG.GEN=really tomorrow

‘I will be able to open (it) tomorrow.’

- 以下では、さまざまなテストが動詞語根を含むスペンをどのようなまとまりとして扱うかを精査する
 - これらのテストは、Tallman (2021) において「記述言語学・言語類型論において語を認定する際によく用いられるテスト」として議論されているものが主である
 - 言語類型論的に多様な言語について提案されたテストを採用している
 - * 命令文を別扱いするのは「複統合的」な言語でも命令文では語根が単独で出現することがあるからである

3 音韻論的な語の認定テスト

- 第一強勢が付与されるドメイン: [語根 - ヴォイス₂]
- 第二強勢も付与されるドメイン: [可能 - ヴォイス₁ - アスペクト - 語根 - ヴォイス₂]
- 第一強勢が移動するドメイン: [語根 - ヴォイス₂]

- (3) a. takbó?
run
'run'
- b. tupar-ín
achieve-PV
'achieve'
- (4) a. tà~takbó?
ASP~run
'will run'
- b. nakà-gawá?
POSS.RL-do
'unintentionally made'
- (5) a. táwag
call
'call' (root)
- b. tawág-an
call-LV
'to call someone'

- 義務的にはじき音化がおきるドメイン: [語根 - ヴォイス₂]
- 随意的にはじき音化がおきるドメイン: [可能 - ヴォイス₁ - アスペクト - 語根 - ヴォイス₂ - 単音節前接語群]

- (6) a. *bayad-an
pay-LV
'pay'
- b. bayar-an
- (7) a. da~dating
ASP~arrive
'will arrive (active voice)'
- b. da~rating
- (8) a. naka-dating=na=din=siya
POSS.RL.AV-arrive=IAM=also=3SG.NOM
'He/She has also arrived.'
- b. naka-rating=na=rin=siya.

- 接中辞が生じるドメイン: [アスペクト - 語根]

- (9) a. d⟨um⟩ating
arrive⟨AV⟩
'arrive'
- b. d⟨um⟩a~rating
ASP⟨AV⟩~arrive
'will arrive'

4 形態統語論的な語の認定テスト

- 単独で発話可能な最小のドメイン: [可能 - ヴォイス₁ - アスペクト - 語根 - ヴォイス₂]
- 命令文で単独で発話可能な最小のドメイン: [語根]
- 単独で発話可能な最大のドメイン: [可能 - ヴォイス₁ - アスペクト - 語根 - ヴォイス₂ - 単音節前接語群 - 複音節前接語群]

(10) ma-ta~takp-an

POSS-ASP~cover-LV

‘can cover’

(11) ma-ta~takp-an=mo=naman

POSS-ASP~cover-LV=2SG.GEN=indeed

‘you can cover (it) indeed’

- 他の要素が挿入できないドメイン: [可能 - ヴォイス₁ - アスペクト - 語根 - ヴォイス₂ - 単音節前接語群 - 複音節前接語群]
- 語順の入れ替えができないドメイン: [可能 - ヴォイス₁ - アスペクト - 語根 - ヴォイス₂ - 単音節前接語群 (の一部)]
- nang 反復構文 (Nagaya 2021) で繰り返すことができる: [可能 - ヴォイス₁ - アスペクト - 語根 - ヴォイス₂]

(12) Na-kita (*ano) =ko=na=siya.

POSS.RL-meet whatchamacallit =1sg.GEN=IAM=3SG.NOM

‘I already (whatchamacallit) met her.’

(13) *Na-kita=na=ko=siya.

POSS.RL-meet=IAM=1sg.GEN=3SG.NOM

Intended for ‘I already met her.’

(14) T⟨um⟩akbo=na=ako nang=t⟨um⟩akbo(*=na)(*=ako).

run⟨AV⟩=IAM=1SG.NOM GEN=run⟨AV⟩=IAM=1SG.NOM

‘I ran and ran.’

5 タガログ語の音韻語と文法語

- これまでの検討の結果をまとめると表 1 のようになる
 - 音韻語と文法語のミスマッチがある
 - テスト間のミスマッチもある
- タガログ語の動詞とその周辺要素をとりあげて分析した場合、ある特定の単位を取りだしてそれ「語」を呼ぶ根拠はあまりない:
 - 異なる語認定テストが異なる認定結果を示す
 - 文法語と音韻語を別に認めるということもできない

表1 タガログ語の動詞語根とその周辺要素をめぐる音韻語と文法語

テスト	可能	ヴォイス ₁	アスペクト	語根	ヴォイス ₂	単音節	複音節
第一強勢が付与							
第二強勢も付与							
強勢移動							
義務的はじき音化							
随意的はじき音化							
接中辞							
最小単独発話							
命令文単独発話							
最大単独発話							
挿入不可能							
語順入替不可能							
nang 反復構文							

- 今回検討した認定テストのうち、「重要なもの」を取り出してそれをこの言語の語の認定基準として扱うことは可能である
 - そうすればこの言語の文法語・音韻語を決めることはできる
 - しかし、そうすることは恣意的で、先にタガログ語の語とは何かを決めてしまうことになる
- 今回の認定テストが個別言語の記述において無駄であるということではない
 - それぞれの現象における正確な記述と分析は重要な個別言語学的課題である
 - タガログ語においては(も)音韻的な単位よりも文法的な単位の方が大きい傾向にあるという指摘はできる
 - これらの記述・分析が「語」の認定に役立っているわけではないということである
- 名詞語根とその周辺要素でも(程度の差こそあれ)同種の問題が起きうる
 - 名詞は動詞に比べて単純な構造を持つため簡単に語が認定できそうな場合もある
 - * 可能やヴォイス、アスペクトの標識をもたない
 - * とりうる接語の数も限定的である
 - 一方で、歴史的事情から名詞と動詞につく接辞が同じため、動詞語根と同じ問題が名詞語根にも生じる場合がある
 - 名詞語根に添加される要素はさまざまあり表1のようなテンプレートにまとめるにくい
- もちろん他の言語で語がうまく認定できないと主張しているわけではない
 - 他の言語では mismatches は観察されないかもしれない
 - タガログ語の問題なのか、語族の問題なのか、類型の問題なのか(たとえば、タガログ語には接頭辞、接尾辞、接中辞、重複があるなど)、現在のところわからない
 - 今後さらにさまざまな「語」の認定問題は検討する価値があるといえる
- 今回の通言語的によく用いられる認定テストによってうまく一つに語が認定できない問題は、言語類型論の重要な方法論的課題として議論されてきたものである
 - たとえば、文法関係、複統合性、動詞連続など

- Croft、Dryer、Haspelmath などの議論を参照
- さらに、一般的にあるテストを使って言語の記述を行うことの難しさの問題でもある
 - 例: 指示詞などの照応表現が語の一部 (ここでは語根) として出現できる

- (15) a. Sa=akin ang=lahat.
 LOC=1SG.LOC NOM=all
 ‘Everything is mine.’
- b. Sana s⟨um⟩a=akin ang=lahat.
 wish LOC⟨AV⟩=1SG.LOC NOM=all
 ‘I wish everything were mine.’

- このように「語」を考えることはタガログ語だけではなく言語学の方法論についても重要な問題群を提示する

参考文献

- Dixon, R. M. W. & Alexandra Y. Aikhenvald. 2002. Word: A typological framework. In R. M. W. Dixon & Alexandra Y. Aikhenvald (eds.), *Word: A Cross-linguistic Typology*, 1–41. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, Robert M. W. 2010. *Basic Linguistic Theory, Volume 2: Grammatical Topics*. Oxford: Oxford University Press.
- French, Koleen Matsuda. 1988. *Insights into Tagalog: Reduplication, Infixation, and Stress from Nonlinear Phonology*. Dallas, TX: Summer Institute of Linguistics and the University of Texas at Arlington.
- French, Koleen Matsuda. 1991. Secondary Stress in Tagalog. *Oceanic Linguistics* 30(2), 157–178.
- Himmelman, Nikolaus P. 2005. Tagalog. In K. Alexander Adelaar & Nikolaus P. Himmelman (eds.), *The Austronesian Languages of Asia and Madagascar*, 350–376. London: Routledge.
- Haspelmath, Martin. 2011. The indeterminacy of word segmentation and the nature of morphology and syntax. *Folia Linguistica* 45(1). 31 – 80.
- Haspelmath, Martin. 2023. Defining the word. *WORD* 69(3). 283–297.
- Jespersen, Otto. 1924. *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unwin Ltd.
- Kaufman, Daniel. 2007. Tagalog clitics and prosodic phonology. Unpublished manuscript.
- Kaufman, Daniel. 2010. The Morphosyntax of Tagalog Clitics: A Typologically Driven Approach. Cornell University PhD dissertation.
- Langacker, Ronald W. 1972. *Fundamentals of Linguistic Analysis*. New York, NY: Harcourt Brace Jovanovich.
- Nagaya, Naonori. 2021. Reduplication and repetition from a constructionist perspective. *Belgian Journal of Linguistics* 34, 259 – 272.
- Schachter, Paul & Fe T. Otnes. 1972. *Tagalog Reference Grammar*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Tallman, Adam J.R. 2020. Beyond grammatical and phonological words. *Language and Linguistics Compass* 14(2). e12364.
- Tallman, Adam J.R. 2021. Constituency and coincidence in Chácobo (Pano). *Studies in Language* 45(2). 321–383.
- Zuraw, Kie. 2006. Using the web as a phonological corpus: A case study from Tagalog. EACL-2006: Proceedings of the 11th Conference of the European Chapter of the Association for Computational Linguistics/Proceedings of the 2nd International Workshop on Web As Corpus, 59–66.